

<同志社人が誇りに思える情報>

同志社ファン・レポート

Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report

発信：同志社ファンを増やす会

第314号・2021年8月1日発信

【Doshisha-now】臨時号

フェイシングで同志社史上初の金メダル

文責：同志社ファンを増やす会・多田 直彦

良くやっていただきました。おめでとうございます。同志社人の誇りです。



次の4項目だけですが急ぎ、情報を集めてお届けします。ご参考まで。

◆太田雄貴さん 平成20年同志社大学商学部卒業

フェイシングと言えば、同志社人としては2大会連続オリンピック銀メダルの太田雄貴さんを思い出す。即ち、2008年北京の個人で銀メダルを、2012年ロンドンの団体でも銀メダルを獲得している。また、選手以外では、2020年夏季オリンピック招致活動のプレゼンターとして、2013年9月開催の第125次IOC総会でスピーチの映像が記憶に残る。

同志社卒だから英語がお得意だったのだろうか？実は、太田氏が日本フェンシング協会会長として決めたことがある。それは2021年からフェンシング日本代表の選出条件に民間英語試験「GTEC」でのレベルA2クリアすること、である。世界で腕を磨くには、英語は必須のことと彼の数々の国際試合で実感したのだろう。

その太田氏の今は、国際フェンシング連盟の太田雄貴副会長。また、以前の日本フェンシング協会の会長は辞している。現役当時は森永製菓所属だった。

◆「エペジーン！」とは？「エペ」とは？

「エペジーン」（一が二つ）というのは、フェンシング・エペ団体の愛称。この言葉は、男子エペの見延和靖選手が2年以上前に記者に愛称を聞かれた際に命名したもので、エペ陣をもじったもので「周囲をジーンと感動させたい」という願いも込めて「エペジーン」と答えた。そこで「エペ」の意味だが公益社団法人日本フェンシング協会公式サイトでは、次のような説明がある。

「エペ」

エペは「突き」だけの競技。突く場所は、全身すべてが有効。相手より先に突いた方にポイントが入り、両者同時に突いた場合は双方のポイントとなる。ランプの点灯でどちらがポイントを挙げたか判断できる。エペという種目は1番競技人口が多い種目。相手の隙をうかがいながら、一瞬で入り込むといった駆け引きが魅力であり、ルールも比較的単純。

なお、太田氏は今年6月まで務めた日本フェンシング協会の会長時代、競技人口を増やすにはエペの普及がカギだと考えていた。「僕もエペを始めて、全日本選手権出場をめざしたい」と驚きの「現役復帰」を宣言したこともある。

また、国際フェンシング連盟の副会長として表彰式で花束贈呈の役をつとめた太田氏は表彰式後、興奮しながら喜びを口にした。

「いやあ、最高。わかりやすい。見ている人にとって、フェンシングの魅力がわかりやすく伝わる。最高！」。観客こそいなかったが、テレビの地上波で決勝が生中継されたことにも感謝した。自分の五輪銀メダルを追い抜いた後輩たちについて、「早く抜いて欲しいと思っていたので」とほめたたえた、と言う。

「フルーレ」

フルーレも「突き」だけの競技。先に腕を伸ばし剣先を相手に向けた方に「優先権」が生じる。相手はその剣を払ったり叩いたりして向けられた剣先を逸らせる。間合いを切って逃げ切るなどすると「優先権」が消滅し、逆に相手が「優先権（すなわち反撃の権利）」を得る。このように、攻撃—防御—反撃—再反撃といった瞬時の技と動作の応酬（剣のやりとり）がこの種目の見どころである。

「サーブル」

サーブルは「突き」以外に「斬り（カット）」がある。ルールはフルーレと同様「優先権」に基づいているが、「斬り」の技が加わる分、よりダイナミックな攻防が見られる。

◆宇山 賢（うやま さとる）平成25年同志社大学商学部卒



三菱電機のホームページから

男子エペ団体戦のリザーブメンバー（控えの選手）の4人目の代表選出だったが、決勝でも出場して次々にポイントを重ねるエース級の働きを見せ、大舞台で輝きを放った。

宇山賢選手は長身と長いリーチを生かしてカウンターを狙う攻めを得意だが、「同志社大学の練習は基本的に『自分で考えてやりなさい』というスタイル。自主性を重んじて人間性を成長させながらやるという風習が自分には合っていた」と語る。

◆同志社大学フェンシング部

表記について『同志社スポーツの歩み第三版』を要約すると次のようなことである。

同志社大学にフェンシング部ができたのは、1937（昭和 12）年であった。戦後になって、牧真一氏の指導により部の基礎が固められた。牧氏の指導を受けた田淵和彦氏（S35 商学）らの活躍により、歴史的な大会に大きく貢献した。また、日本から世界の躍進するきっかけは 1987（昭和 62）年にフランスナショナルチームが日本に遠征してきたことである。世界のトップスキルを目の当たりにしたのである。逆に、フランスへの遠征が5年後に行われたが、それが原動力になり各選手権で大いに活躍出来た。その後、太田雄貴はフェンシング協会の「500 日合宿」に選ばれ、拠点を東京に移し、新幹線通学をして頑張り、良き結果を残していった。（おわり）